

# 九州国立博物館における染織品修理実施の流れ

九州国立博物館 原田あゆみ・志賀智史・大橋有佳

## Q. 修理作品の選定とその優先順位

選定する基準として、状態が悪く取り扱いに危険を伴うものが選定されますが、特に活用（展示）の機会が多いものを優先しています。

毎年の修理点数は決まっていません。

九博所蔵の染織品のうち、平成18年に寄託されたインド・東南アジア染織コレクションは数が多く、受入時に生物処理も懸念されたため、早い段階から保存修理の担当者と連携して保管方法を検討しました。翌年、購入手続きを進め、当館の列品となったため、平成20年度から本格的に状態確認を行い、改めて保管方法を検討し、形態にあわせて保存箱を作成しました（図1～図4）。

### 保存方法と保存箱の一例



図1 刺繍がほどこされている部分といない部分の境目に皺が生じる



図2 境目にクッションとして薄葉紙をあて、巻いたときに皺にならないよう調整する

修理にあたっては状態点検調書を基に、作品の担当者と保存修理の担当者間で相談し、実施計画を立てます。

作品の新規購入を検討する際には、対象作品の状態により修理の有無や修理規模も考慮されますが、九博の場合、他館に比べると収蔵品が少ないため、作品の価値や館のコンセプトに合致した作品であれば、修理が必要と判断される作品であっても、購入候補として積極的に検討しています。

## Q. 修理予算について

基本的に館蔵品の修理の場合は、染織品に限らず、九州国立博物館の運営費だけです。



図3 卷芯（中性紙の筒 径7センチ）に巻く



図4 中性紙の外箱中に受けを作り、浮かせて保管

### Q. 修理計画に関わるメンバーについて

九州国立博物館の染織担当者と保存修理の担当者です。

### Q. 修理額の見積もりについて

修理設計見積もりは、例年9月・10月に業者から見積もりを取ります。

その後、館内の鑑査会議を行い、修理の必要性を検討しながら、仕様と経費の概要を把握します。その後、修理仕様策定委員会、修理契約委員会を招集します。修理契約委員会で企画競争入札と判断された場合には、20日間の公告、現場説明会を経て列品等修理請負候補者選定委員会で業者選定が行われます（図5）。

九州国立博物館の特色は修理仕様策定委員会があることだと思います。候補作品に対してその修理仕様が適切かどうか、またその仕様に対して経費が妥当であるかどうかを、修理事業に永年携わっていた

外部の専門家を招へいして審議の場を設けます。これを受けて修理契約委員会で契約方法を審議します。

契約形態としては、一般競争入札、企画競争入札、事前公募型随意契約および随意契約（特命随契）があります。100万円未満の事業であれば随意契約、それ以外は企画競争入札が選ばれることが多いようです。ただ、現状では100万円未満の事業であっても、よりよい仕様と費用を提案してくる業者がいる可能性を考え、企画競争入札が選ばれる傾向があります。

企画競争入札では、競争参加資格審査委員会で入札参加者の資格審査を行います。さらに、現場説明会で入札参加者が作品調査を行い、それを元に修理の計画、必要な予算まで含めた企画書を作成します。

その後、請負業者選定委員会を行い、最も適切な企画書を提出した修理業者を契約先として選定します。

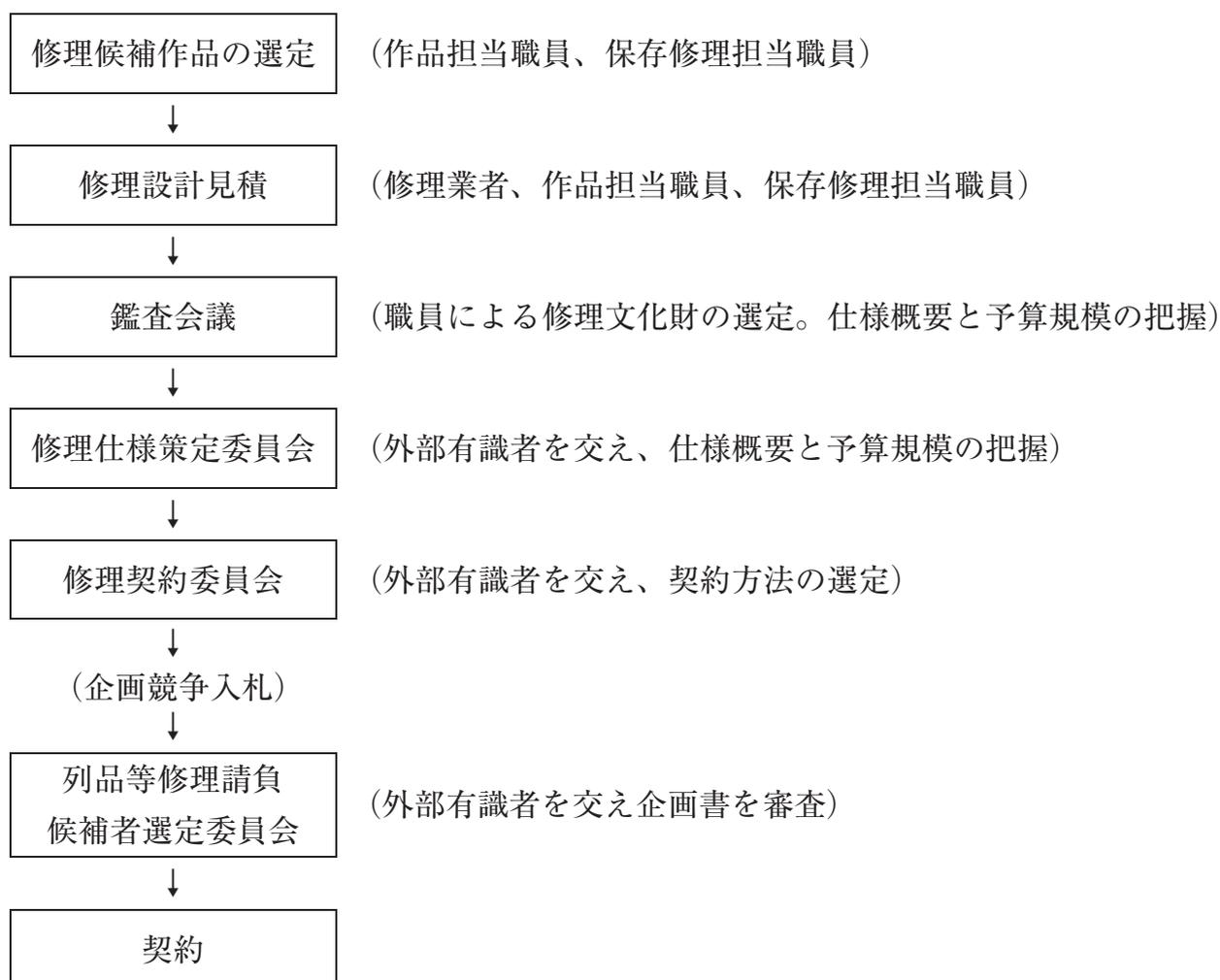


図5 修理決定までの流れ（企画競争入札の場合）

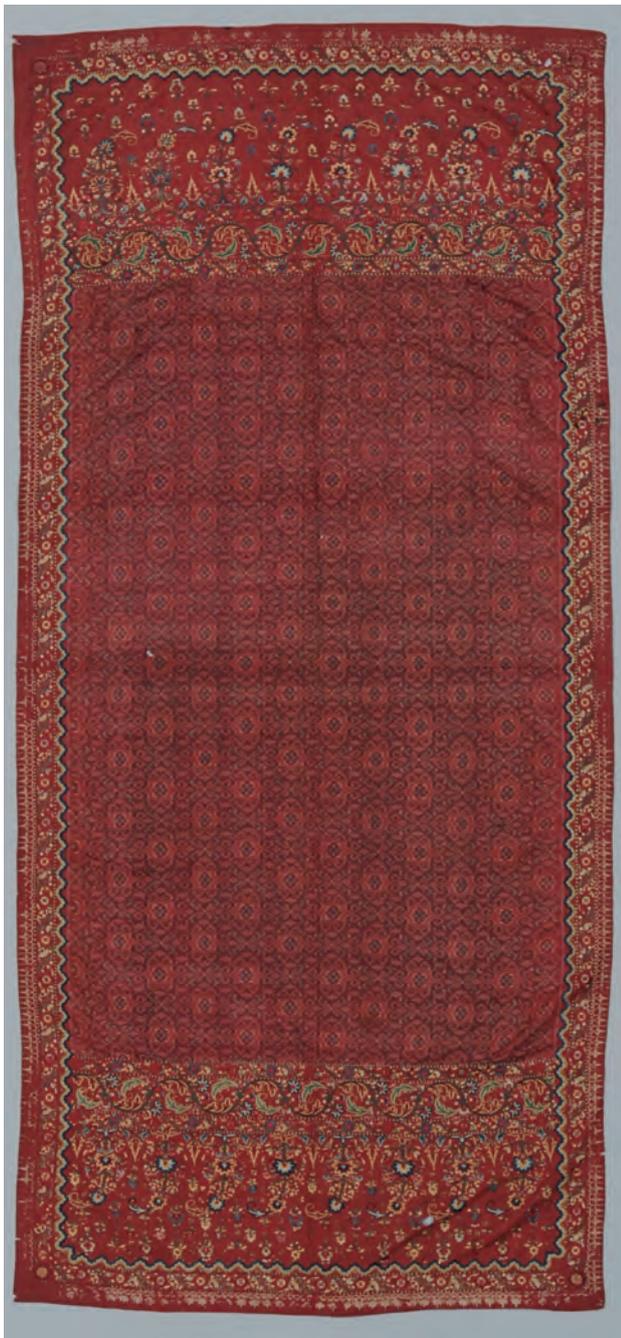


図6 紫地花文緯緋両面刺繍肩掛(九州国立博物館蔵) 修理後



図7 裏からの補修後

**Q. 修理設計見積もりに、法量・技法等の基礎情報は提供されますか。**

提供もしますし、実際に作品を見てもらっています。

ただし、基本的には蛍光 X 線分析などの科学分析はしていません。基本的に日本の伝統技術の中で対応できる、あえて科学分析をしなくてもできる修理でやっています。

希望があれば、化学分析も行って情報も提供します。

**Q. 染織品の修理に関して、修理の仕様は、具体的にはどんな項目がありますか？**

基本的には、傷んでいる部分あるいは保存上問題と思われる項目を書き出し、それに対して修理の仕様項目を立てます。染織品に特化した修理の仕様はありませんが、基本的には、作品の現状の情報（形状や寸法、損傷の状況）から、修理の方針を決めていきます。修理仕様の項目には、たとえば、①観察・現状の撮影、②補修材料の製作調達、③補修の具体的な方法（補修が必要な部分に対して、使用する素材と適用する方法）、④修理実施の期間とその流れ、などがあります。

ただ、仕様書の段階では、補修布や補修糸といった修理材料については言及していません。実際に修理を進めていく中で、提案していただきつつ協議し決定しています。補修布や補修糸を選択する際には、合成染料か、天然染料のどちらかを優先して使用するというわけではなく、補修布の色調整のしやすさや、修理後も変色や色移りなどがなく、作品に悪影響を及ぼさないという観点から選択しています。

たとえば、紫地花文緯緋両面刺繍肩掛（九州国立博物館蔵）の修理では、補修布の染色に合成染料が選択されました（図6～図8）。



図8 補修布を染色する様子

鑑賞しやすさを損ねることがないように、補修布は修理後も目立たないように色調整される必要があります。合成染料を使用する方がこのような微妙な色調整がしやすく、また、この作品の補修布のように濃い色で染色する場合でも、染色回数が少なく済むので布が傷みにくく、染色後も天然染料に比べ摩擦で退色しにくいという堅牢さも持ち合わせている場合が多くあります。修理案件に対して染料の堅牢度や保存性を優先した結果、合成染料を使用することになったわけです。

### Q. 九博内の修理施設について

毎年12月に業者から次年度の施設使用申請を提出いただきます。この申請を受けホームページ上で事前確認公募を行い、他の施設使用希望者の有無を確認します。その後、修復施設運営委員会の委員が、国指定品を含めた修理計画をより多く持つ業者を優先的に選定します(図9)。

### Q. 展示補助具について

衣桁は2本立ちと1本立ちと併用しています。

開館準備時に展示具を検討する際に、できるだけ汎用性を考慮して制作しました。展示台はベースに



図9 九州国立博物館文化財保存修復施設

対して、高さ調整台や天板を組み合わせ、作品の形体にあわせて使用できる工夫をしています。衣桁の制作に関しては、開館準備時に京都国立博物館と、東京国立博物館からそれぞれで使用しているものをお借りして参考にしました。当時の学芸部長の意見で衣桁のベースはつや消しのアクリルを使用しました。2本立ちタイプが基本ですが、1本立ちタイプのものも、連結させて2本立ちとして使用することができます。襟当ても大きさを変えたものを作りましたが、作品それぞれ形も異なるので、既存のものがあわない場合は作品に合わせて、中芯の様なものを自作して対応しています。袖棒は3種類の長さ揃えています。

着物の展示方法としてマネキンに着せ付けたことはありますが、通常は衣桁を使用しています。作品の全体像がわかる展示を心がけていますが、数多く展示する際には、堅牢な作品を選んで一部の作品を立体的にドレープを入れるような展示をすることもあります。背面を見せたい作品の場合は単体ケースに展示をして、両面から観ていただけるようにしています（図10）。

#### Q. バックヤードツアーについて

博物館は展示がメインだと思われがちです。そうになると、収蔵、管理、研究といった側面があまり表に出てこない。バックヤードツアーを行うのは、博物館というのは「作品を伝えるという基本が軸にあって、そのために収蔵や展示とか修理をおこなっていますよ」ということを来館者に認識いただくという目的があります。

そのために、開館のときに可能なところは全てガラスの仕様にして、収蔵庫にも小窓を付けて見てい

ただくことになったのです。国立博物館では、こういうところで収蔵品を保管していますよというのを公開したわけです。

※本稿は平成29年7月21日に実施した聞取調査（調査者：中山俊介・菊池理予）を基に加筆訂正をしたものです。

#### 【参考文献】

- ・『博物館科学の取り組みと設備』九州国立博物館発行、2017年
- ・『文化財保存修復施設』九州国立博物館発行、2015年
- ・保存修復室「文化財保存修復施設の設置について」九州国立博物案紀要『東風西声』第2号、2006年
- ・「第3章 文化財保存修復施設の紹介」『特集陳列 博物館と文化財修理－九州国立博物館文化財保存修復施設解説3周年記念－』2003年



図10 九州国立博物館文化交流展示室 染織品の展示